

志摩市の文化財

志摩市教育委員会

志摩市の文化財



序

紀伊半島の東に突き出た志摩半島は、北は伊勢湾、南は熊野灘に面しています。志摩半島の南東端に、平成16年10月に旧志摩郡の5町が合併して誕生したのが志摩市です。市全体が伊勢志摩国立公園に含まれ、英虞湾は岬や入り江が入り組む複雑な地形のリアス海岸が特徴的で、湾内に大小の島々が点在する風光明媚な景観で知られています。

海に面した穏やかな気候は、暖地性の植物を育むとともに、豊富な海産物をもたらしました。古代の志摩国は、そうした海産物を、都や伊勢神宮に納める御食つ国とされました。また、平地が少ない志摩半島は、陸路よりも海路によって他の地域と結びついていたようで、様々な地域との接触があったようです。そうした交流がこの地域に豊かな文化を生み出していきました。

近年、そのようにして培われてきた地域の自然や文化は、ともすると時代遅れの不要なものとされて失われてしまいがちです。ただ、そうしたもののこそが、地域の人々の財産となり、観光業などの資源となっていくのだと思います。

このたび、志摩市にある文化財をまとめた「志摩市の文化財」を発行することとなりました。多くの方に志摩市の文化財について知っていただくとともに、新たな志摩市の魅力を発見していただけることを期待しております。

最後に、本書の刊行にご尽力いただきました執筆者の方々とご協力いただきました関係者の方々、そしてこれまで文化財の保存に永きにわたりご尽力をいただいた地域のみなさまに深くお礼を申し上げます。

平成30年2月

志摩市教育委員会

教育長 筒井 晋介

例 言

- 1 本書は、志摩市に所在する指定・登録文化財について掲載したものである。
- 2 本書は、一般財団法人自治総合センターが、宝くじの社会貢献広報事業として、宝くじの受託事業収入を財源として実施しているコミュニティ助成事業の活力ある地域づくり助成事業の助成を受けて発行した。
- 3 本書の執筆者は以下のとおりである（敬称略）。執筆の分担は目次に示した。
太田 光俊（三重県総合博物館）
小濱 学（三重県教育委員会事務局 社会教育・文化財保護課）
崎川由美子（志摩市歴史民俗資料館）
瀧川 和也（三重県総合博物館）
竹田 憲治（三重県教育委員会事務局 社会教育・文化財保護課）
中野 環（三重県総合博物館）
東原 達也（三重県文化財保護指導員）
三好 元樹（志摩市教育委員会事務局 生涯学習スポーツ課）
- 4 本書で使用した写真は執筆者、志摩市、志摩市教育委員会が撮影したもののほか、以下の方々から提供を受けた（敬称略）。
泊正徳、松本高正、山本幸平、越賀青年団
- 5 本書の作成業務は志摩市教育委員会が行った。編集是三好が行った。
- 6 「越賀の舞台」、「旧越賀村郷蔵」、「中六店舗」、「大王埼灯台・門柱及び塀」、「安乗埼灯台」、「神武参剣道場」についてはホームページ「三重県文化財データベース」、「志摩国分寺本堂」については志摩市文化財台帳の記述を引用しつつ作成した。

所在地に※が付いているものは常時公開されていませんので、見学などについては志摩市教育委員会事務局生涯学習スポーツ課（TEL:0599-44-0339）にお問い合わせください。

目 次

序

例言

国指定文化財

- ①銅造如来坐像・・・（瀧川） 1
- ②安乗の人形芝居・・・（崎川） 2
- ③磯部の御神田・・・（崎川） 3
- ④鳥羽・志摩の海女漁の技術（小濱） 4

県指定文化財

- ⑤木造仏頭・・・（瀧川） 5
- ⑥木造薬師如来坐像・・・（瀧川） 6
- ⑦木造十一面観音立像・・・（瀧川） 7
- ⑧鰐口・・・（瀧川） 8
- ⑨如来形坐像懸仏・・・（瀧川） 9
- ⑩紙本墨書大般若経・・・（瀧川） 10
- ⑪紙本墨書大般若経・・・（瀧川） 11
- ⑫埴製枕・・・（三好） 12
- ⑬鹿角装大刀・・・（三好） 13
- ⑭越賀の舞台・・・（東原） 14
- ⑮波切のわらじ曳き・・・（崎川） 15
- ⑯ささら踊り・・・（崎川） 16
- ⑰志摩国分寺跡・・・（三好） 17
- ⑱浜島古墳・・・（三好） 18
- ⑲旧越賀村郷蔵・・・（東原） 19
- ⑳おじょか古墳・・・（三好） 20
- ㉑和具大島暖地性砂防植物群落（中野） 21
- ㉒宇気比神社樹叢・・・（中野） 22

市指定文化財

- ㉓石造宝篋印塔・・・（竹田） 23
- ㉔石造五輪塔群・・・（竹田） 23
- ㉕志摩国分寺本堂・・・（東原） 24
- ㉖石造五輪塔群・・・（竹田） 24

- ㉗木造大日如来坐像・・・（瀧川） 25
- ㉘木造薬師如来坐像・・・（瀧川） 25
- ㉙曼荼羅石・・・（瀧川） 26
- ㉚仏足石・・・（瀧川） 26
- ㉛木造聖観音立像、木造護法神立像、
木造観音立像・・・（瀧川） 27
- ㉜木造如来形坐像・・・（瀧川） 29
- ㉝木造十一面観音立像・・・（瀧川） 29
- ㉞木造十王像附脱衣婆像（残欠）、
司命像、司録像・・・（瀧川） 30
- ㉟木造薬師如来立像及び両脇侍立像
・・・（瀧川） 31
- ㊱木造薬師如来坐像・・・（瀧川） 32
- ㊲木造聖観音立像・・・（瀧川） 32
- ㊳木造薬師如来坐像・・・（瀧川） 33
- ㊴鰐口・・・（瀧川） 33
- ㊵鉄製砲身・・・（三好） 34
- ㊶鰐口・・・（瀧川） 34
- ㊷紙本墨書陀羅尼経・・・（太田） 35
- ㊸鵜方村文書・・・（太田） 35
- ㊹下之郷村水帳・・・（太田） 36
- ㊺沓掛村袴屋文書・・・（太田） 36
- ㊻和同開珎・・・（三好） 37
- ㊼画文帯環状乳神獸鏡・・・（三好） 37
- ㊽佐々木コレクション・・・（三好） 38
- ㊾高札・・・（太田） 38
- ㊿切支丹制札と徒党制札・・・（太田） 39
- ㊱大的矢・小的矢の日和山方位石
・・・（崎川） 39
- ㊲五知の赤旗・・・（崎川） 40
- ㊳しめ切り神事・・・（崎川） 40

54	ひっぼろ神事・・・・・・・・・・	(崎川)	41
55	鼓踊・・・・・・・・・・	(崎川)	42
56	鶴方獅子舞・・・・・・・・・・	(崎川)	42
57	渡鹿野の天王祭・・・・・・・・・・	(崎川)	43
58	坂崎の神祭・・・・・・・・・・	(崎川)	44
59	志島古墳群・・・・・・・・・・	(三好)	45
60	泊古墳 鳶ヶ巣1号墳 鳶ヶ巣2号墳 ・・・・・・・・・・	(三好)	46
61	トキワガキ群生・・・・・・・・・・	(中野)	46
62	隣江寺のイチョウ・・・・・・・・・・	(中野)	47
63	隣江寺のクスノキ・・・・・・・・・・	(中野)	47
64	家建の茶屋跡のオオシマザクラ ・・・・・・・・・・	(中野)	48
65	玉泉庵のナギ・・・・・・・・・・	(中野)	48
66	小的矢の日和山のタブノキ	(中野)	49
67	的矢村神社のイスノキ・・・	(中野)	49
登録文化財			
68	中六店舗・・・・・・・・・・	(東原)	50
69	大王埼灯台・門柱及び塀・・・	(東原)	50
70	安乗埼灯台・・・・・・・・・・	(東原)	51
71	神武参剣道場・・・・・・・・・・	(東原)	51
72	旧猪子家住宅主屋・土蔵・門柱 ・・・・・・・・・・	(東原)	52
73	志摩半島の生産用具及び関連資料 ・・・・・・・・・・	(崎川)	52

文化財地図

指定年月日:1963(昭和38)年7月1日

所在地:和具観音堂※

像高16.8cm、銅造、平安時代中期

本像は像高が20cmにも満たない小さな仏像ですが、平安時代の数少ない金銅仏の、しかも優れた作例として全国的にも注目されるものです。

一般的な如来像の姿で、衲衣を左肩にかけて着用し、左足を上にして足を堅く結んで坐って(結跏趺坐)います。左手は膝上に置いて掌を上にして五指を軽く曲げますが、右手は肘から先を失っています。このため、釈迦や薬師といった尊名が特定できません。

蠟を用いて像の原型をつくり、これに溶かした銅を流し込む鋳造技法によってつくられています。また、表面全体に火を受けた痕跡が認められ、表面が梨地状に荒れています。ところで、右手肘先の欠失した部分の断面をよく見てみると、鑄造の際に発生したガスなどでできた「鬆」と呼ばれる状態が確認できます。このため、この部分は金属がもともと脆弱であったことがうかがえます。おそらく、これに何らかの物理的な要因が加わって折損し、失われたのではないかと推測されます。

小像でありながら、盛り上がった肉髻や厚みのある両耳、がっしりとした両膝など、全体に力のこもった造形が感じられます。また、蠟型の特徴である捻塑的で柔らかな表現が面貌や指先に見られます。このように力強い量感の中にも穏やかさが感じられることから、制作年代は10世紀でも早い頃と考えられます。

伝来については、和具津島神社に祀られていたといわれていますが、詳細は不明です。



指定年月日:1980(昭和55)年1月28日

場所:安乗人形芝居舞台(阿児町安乗845)

9月15日・16日の2日間、安乗人形芝居の舞台で行われます。

安乗では人形芝居を「デコ(木偶)シバイ」と呼び、多くの変遷を経ながら安乗神社の祭礼行事として、400年以上もの長い間伝承されてきました。

江戸時代、安乗は、御城米船(年貢米を輸送する廻船)が寄港する港として幕府直轄の船番所や灯明台が設置され、大阪と江戸を結ぶ航路の重要な風待ち港として栄えました。そのため大阪文楽の人形遣いの技に加えて、かしら・衣装なども海を渡って入り、文化、文政時代には三人遣いの人形も伝えられて、人形芝居は隆盛を極めました。

安乗港の衰退や大正末期の不況などで、1926(大正15)年に一時中断されましたが、有志が一座を組織して1950(昭和25)年の初午の祝いで披露されて復活し、安乗人形芝居保存会が結成されました。

1月2日には二ワの浜と弁財天の祠の前で式三番叟が奉納されます。三番叟の三体の人形は、地元では「サンバツサン」と呼ばれ、航海安全と大漁満足を祈願する漁民信仰の神の使いとして長く伝えられ、人形芝居の上演が中断された間も継承され、それを支える袴屋制度も厳格に守られています。

起源は、1592(文禄元)年に、志摩国の領主、九鬼嘉隆が八幡宮(現安乗神社)に戦功のお礼参りに訪れた際、村びとに人形芝居を許したのが始まりであると伝えられています。



指定年月日:1990(平成2)年3月29日

場所:伊雑宮御料田(磯部町上之郷374)

6月24日、皇大神宮(内宮)の別宮「伊雑宮」^{ごりようでん}の御料田で行われる御田植祭で、住吉大社、香取神宮の御田植祭と共に、日本三大御田植祭の1つに数えられています。

1871(明治4)年、御料田が官有となったため、翌年から廃絶のやむなきに至りました。しかしその後も有志の人びとが虫除祈念の名目で私田を借りて御田植を続け、また1891(明治24)年「御田植旧復義願」^{ききゅうくふぎがん}を提出するなど、再興を願う人々の努力が実を結び、期日を新暦6月24日と定めて正式に再興されました。

祭りは磯部9郷といわれた地区の人たちが7年に一度の持ち回りで奉仕をします。主な役人は太鼓打ち、^{ささら}鼈すり、笛、^{おど}大鼓、^{こど}小鼓、早乙女、^{うたい}謡、^{えぶりさし}杵差、^{たちど}田道人などですが、勤番区の人たちの大半が裏方として参加し祭りを支えています。

当日は、衣装を身にまとった役人たちが伊雑宮でお祓いを受けたあと、御料田まで列になって進みます。11時半頃から裸男たちによる勇壮な竹取り神事が始まります。^{ごんぱうちわ}軍配団扇や^{いみだけ}忌竹は、大漁満足や海上安全の御守りとして漁船に、また五穀豊穡や家内安全を願って田や神棚に祀られます。^{まつ}竹取り神事が終ると荒れた田をならし、お田植神事、^{さいとりさし}刺鳥差の舞、そして再びお田植え神事と続きます。

午後、役人や関係者一同が列を成し、御料田から伊雑宮へ200mほどの距離を2時間余りかけて一の鳥居前に踊り込み、境内に整列します。そして太鼓打ち、鼈すりの3人が千秋楽の舞を納め終了します。

起源は、踊込歌の歌詞や1280(弘安3)年の古文書に御料田に関する記述があること、さらに伊雑宮の始まりを記した「倭姫命世記」^{やまとひめのみことせいぎ}が著された時期などから、平安時代末期から鎌倉時代初頭にかけて、既に何らかのかたちで行われていたと考えられています。



指定年月日：2017(平成29)年3月3日

場所：志摩市・鳥羽市

志摩市と鳥羽市で、現在、755人の海女が活動しています（2014(平成26)年度末）。志摩市と鳥羽市をあわせて27地区で海女漁が行われており、女性と男性がともに漁に従事しています。平城京で出土した木簡のアワビの記述や、『万葉集』で^{おおとものやかもち}大伴家持や^{やまのうえのおくら}山上憶良が海女漁の様子を歌に詠むなど、歴史性があるものと言えます。海女漁は、地域によってそれぞれ呼び方が違いますが、「海女が、陸地から泳いでいって漁を行うもの（カチド）」、「1隻の船に複数の海女が乗り合わせ、各漁場にわかれて漁を行うもの（ノリアイ）」、「男女の組み合わせ（夫婦、親子）で、船に乗り込み、男性が滑車を使って綱で女性を引き上げるなどの共同作業で漁を行うもの（フナド）」の3種類の方法があります。身体ひとつと簡単な道具で行う漁の伝統を今に伝えています。

海女は、水中メガネやウエットスーツを身に着け、「ノミ」と呼ばれるヘラ状の道具を使い、アワビやサザエなどを採ります。「ノミ」は大小さまざまで、先端を曲線的に曲げたカギがついたものもあります。志摩市と鳥羽市で、漁で使う道具に、差はほとんどありません。海女がそれぞれで、ノミを曲げたり、材質をステンレスにしたりと、道具を使い易くする工夫をしています。

三重県教育委員会の調査（2010～2013(平成22～25)年度）により、志摩市や鳥羽市の海女漁には、「女性の素潜り漁が継続されてきた歴史」、「漁場を識別する能力」、「伝統的な漁具を継承し、男女の役割分担を生み出す地域性」、「古代から続く伊勢神宮と地域との関係」といった部分に特色があることがわかりました。また、漁に際しての「ツイ（ヤ）、ツイ（ヤ）」の呪文や「セーマン」「ドーマン」と呼ばれる魔除けの呪符など、周辺の習俗もよく残っていることから、海女漁としては日本で初めて、重要無形民俗文化財（民俗技術）に指定されました。今後は、文化財の保護団体である志摩海女保存会や鳥羽海女保存会が、文化財の保存と継承に取り組んでいくことになります。



志摩町和具の海女漁

指定年月日:1957(昭和32)年3月29日

所在地:和具観音堂※

総高98.0cm、木造、古色、平安時代後期
和具観音堂の仏頭は、もとは像高2メートル余りの如来像の残欠で、現在は頭部前面のみで後頭部を失っています。

材質はヒノキで、漆箔を施していたと考えられますが、現在は剥落してその痕跡は認められません。像の構造は寄木造で、頭部は耳の中央で前後に寄せ、内部はやや粗雑な内削を施しています。肉髻上部を中心とした螺髪部分や左耳たぶの下部、唇や顎の下などに虫損が見られ、特に上唇の損傷は惜しまれます。また、右頬下から顎にかけて後世に丸のみで削った跡があり、ひょっとすると、虫損によって荒れた表面を整えようとしたのかもしれない。

伝承によれば、本像は和具城主の和具(青山)豊前が九鬼嘉隆の水軍に従って朝鮮に出兵した際、戦利品として持ち帰ったものであるといわれます。しかし、造形上の印象や様式的特徴から判断して、朝鮮ではなく日本で制作されたものであることは明らかで、平安時代後期、11～12世紀の作と考えられます。この頃、都では仏師定朝の作風が非常にもてはやされ流行しますが、本像もその影響下で制作されたものと思われます。ただ、やや切れ長の目をはじめとする面相部の表現は、定朝様よりもやや古様で、おそらく地方仏師の作と思われます。



指定年月日:1962(昭和37)年2月14日

所在地:国分寺※

像高188.0cm、^{よせぎづくり}寄木造、^{しっばく}漆箔、室町時代（像内墨書銘：1507(永正4)年）

国分寺は、その名が示すとおり奈良時代に創建された志摩国分寺跡の一角に建つ寺院で、現在は天台宗に属しています。本像は、その本尊で、像高188cmという志摩地方でも屈指の大きさです。

ヒノキ材の寄木造で、表面は漆箔が施され金色に輝いています。像内背面の^{ぼくしよめい}墨書銘により、1507(永正4)年に^{じょうえい}仏師定栄によって造立されたことが判明します。このほか、頭部の内側にも人名が墨書されており、これは造仏に係る寄進者名と考えられます。

本像の作者定栄は、1496(明応5)年に大和長谷寺の十一面観音立像再建に参加した^{あのうつ}安濃津の定栄と同一人物と思われる、その翌年には津市殿村自治会所蔵の木造十一面観音坐像を制作（墨書銘）しています。彼の子孫も^{いんちよう}仏師として活動しており、鳥羽市円照寺薬師堂の本尊、木造薬師如来坐像は、定栄の孫の院長の作です。また、最近では定栄が安濃津に居住しながらも、都で造仏活動を行っていたことが指摘されるなど、味深い動向がうかがえます。

本像は、志摩市はもとより三重県の室町彫刻を代表する一作であり、また、仏師の活動の様子を考えるうえからも重要な作と言えます。



指定年月日:1973(昭和48)年3月31日

所在地:和具観音堂※

像高155cm、木造、古色、平安時代中期

本像は和具観音堂の本尊です。頂上に仏面、髻の側面に二面、地髪部に八面の頭上面を配し、化仏(頭上の小像)は現在失われています。条帛と天衣をかけ、裳(折り返し一段)を着し、両膝の間には渦文を彫り出しています。左手は胸の前で水瓶を持ち、右手はゆるやかに垂下して錫杖を握ります。腰はかすかに左側へ捻っているようで、わずかに右足をゆるめて蓮華座の上に立ちます。本像は、いつの頃からか錫杖を持つ奈良県長谷寺の本尊と同形式の十一面観音像に造り替えられていますが、当初は通常の十一面観音像であったと考えられます。

材質はヒノキで、現在は黒っぽい古色ですが、もとは漆箔や彩色を施さない素地像であったと考えられています。

構造は一本造で、頭と体のほとんどを一枚から彫り出し、内割はありません。左手前腕の半ばより先、右手首、両足先をそれぞれ別ぎ付けます。顔面は、後世の彫り直しがかなりあるものの、広い眉間と固く結んだ唇などに当初の名残が感じられます。なお、目は当初、彫眼であったものが、後世に玉眼に変更されたため、像容を損じていました。1989(平成元)年の保存修理で本来の彫眼に復元され、現在、取り外された玉眼は、本像の信仰を物語る資料として別途保存されています。

体部は、強い張りを持った胸部や両乳下の帯状の隆起、また、異様に太い上腕や胴のくびれが印象的です。奥行き深い体部、特にがっしりとした腰部は正面観以上の重々しさを持ち、1つの木塊を思わせる迫力を見る者に与えます。衣文は大まかな粗い彫りで、布の持つ軽やかな質感はあまり感じられません。このように全体にくせの強い、地方的で重厚な雰囲気を漂わせています。制作は平安時代中期で、10世紀頃の地方仏師の作と考えられます。

伝来は不明ですが、和具地区の厚い信仰を集める観音堂の本尊であり、志摩地方に残る比較的早い時期の作例として注目されます。



指定年月日:1955(昭和30)年4月7日

所在地:立神ふれあいセンター※

直径36cm、厚さ12cm

鰐口とは、仏堂や社殿の正面軒下に吊るす金属製の音響具で、参詣者は、その前に下げられた綱を振り動かして打ち鳴らします。円形で中空、下方に横長の口があるのが特徴です。この鰐口は、かつて立神の薬師堂瑠璃殿の正面に掛けられていたもので、銘文から1460(長禄4)年に制作されたものとわかります。

銘文は、銘帯に次のように印刻されています。

(右)「長禄二二年庚辰二月一日」

(左)「山國廣田寺備後源三郎」

これまで、廣田寺の上にある「山國」の山と國の間には、一字が入るものとされ、「山□國」というように銘文が紹介されてきました。しかし、実際に文字の間隔を見てみると、一字が入る隙間はなく、また一字だけ読めないというも何か不自然な感じがします。ここはむしろ「山□國」ではなく、「山國」と読むほうが合理的かつ適切であると考えられます。おそらく「山國」は、丹波国桑田郡に所在した禁裏御料の山国庄に当たるものと思われます。現在の京都市右京区京北町にあたります。この山国庄にある御霊神社の神宮寺が「高田寺」で、同庄の郷寺でもあり、政所がおかれまして。この高田寺が、銘文の廣田寺に該当するものとみられます。ただ、鰐口が立神に至った経緯は不明です。



指定年月日: 1996(平成8)年3月7日

所在地: 福壽寺※

鏡板径36.5cm、南北朝時代(1336(建武3)年)

懸仏は、古くは御正体と呼ばれ、一般的な形式は、円形の銅板（鏡板）に立体的な仏像や神像を鋳などで取り付け、板の上部に付けた釣環でつり下げて礼拝します。このように銅製のものが多い懸仏の中で、福壽寺のものは木製で比較的珍しく、志摩市はもとより県内でも注目されます。

厚さ3cmほどのヒノキ材の円形鏡板の上部に吊孔2か所を設け、同じくヒノキ材一木造の如来坐像を釘止めしています。如来像は両手を袖に隠して蓮華座上に坐る姿で、手が袖の中に隠れているため、尊名は不詳です。もと下五知にあった熊野権現社に伝わったものとされ、阿弥陀如来として信仰されてきたようです。

背面に「建武三年／二月」の墨書があって、造像当初のものと考えられています。しかし、この1336(建武3)年は制作年ではなく、何か施入（寺などにものを寄進すること）などに関わる別の意味を持つとの見解もあり、また、鏡板と仏像が本来一具であるかについても、今後検討が必要になると考えられます。



指定年月日:1955(昭和30)年4月7日

所在地:立神ふれあいセンター※

縦105.8cm×横152.0cm、紙本墨書、改装折本、平安時代後期～江戸時代

大般若経は、唐の玄奘が最晩年に訳したもので、全600巻という膨大な規模を誇り、あらゆる經典の中で最大を誇ります。立神に伝来した大般若経は、平安時代に書写されたものを中核に、江戸時代に補われたものや木版経を含めた全600帖が三合の櫃に納められていました。1350(観応元)年に伊勢国にもたらされ、その後、時期は不明ながら立神の所有になりました。

1674(延宝2)年に円空によって補修され、巻子を折本仕立てに改められました。その際、経の見返しに描かれた釈迦如来や十六善神は、簡略ながら大胆かつのびやかな筆致で、100巻以上にわたって貼り込まれています。たいへん珍しい円空の絵画作例として注目されます。



指定年月日:1964(昭和39)年10月16日

所在地:金剛院※

縦105.8cm×横152.0cm、紙本墨書、改装折本、^{おりほん}平安時代前期～江戸時代

片田の真言宗醍醐派三蔵寺に伝来した大般若経で、現在、第550巻を除いた599帖が残り
 ます。現状は折本ですが、もとは巻子本で末尾にその痕跡が残ります。折本への改装は、
 1674(延宝2)年の円空による補修と一般にされていますが、むしろそれ以前の可能性が
 考えられます。

円空の見返し絵は基本的に10巻ごとに貼り込まれるほか、93、297、578の3巻にも
 認められ、計58巻に残されています。その筆遣いには大胆な省略も認められますが、第
 1巻に見られるような細やかな描写もあって、円空が描いていく中で作風を変化させてい
 く過程がよくわかります。最初は如来や菩薩の各尊を丁寧^{てんねい}に描いているのですが、それら
 はやがて簡略^{かんりやく}で奔放な構図へと大胆に変化していくのです。

この時期、大般若経の絵と呼ぶ^{ていねい}のかのように、円空の仏像にも作風の変化が見られる
 ことが指摘されています。初期の丁寧な仕上げを行う作風から、後に「木端仏」と呼ばれ
 るような、木を割った時にできる木目やノミ痕を効果的に用いた円空独自の作風へと変
 わっていくのですが、その大きな変化が志摩地方滞在後に見られるようになってくるの
 です。円空の作風について考えると、志摩地方は意外に重要な役割を果たした地域と言
 えるかもしれません。



指定年月日:1995(平成7)年3月13日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)(寄託資料)

おじょか古墳の石室内に置かれていた土で作られた枕です。古墳に葬られた人の頭をのせたと考えられます。大きさは高さ約28.5cm、幅約32.6cmです。古墳から出土した埴製枕はこの他に、奈良県の燈籠山古墳と五條猫塚古墳、京都府の産土山古墳の3例が知られており、いずれも近畿地方で見つかっています。

おじょか古墳の埴製枕は他の3例に比べて装飾が豊かです。円筒形の脚台部の上に、頭をのせる座部をのせ、その後ろに板状の衝立部が付けられています。衝立部の両面と座部の裏面には直弧文という直線と円弧を組み合わせた、古墳時代に流行した文様が線刻によって描かれています。衝立部には四角い透かし穴が開けられ、縁辺には複雑なかたちの鱗飾りがつけられています。同様のかたちの飾りは松阪市の宝塚1号墳などで出土している船形埴輪や椅子形埴輪、鬚形埴輪などに見られます。また、表面にはベンガラと呼ばれる赤色の顔料が塗られていました。

脚台部から衝立部にかけて突帯が貼り付けられ、脚台部には円形の透かし穴があけられており、古墳に立てられる円筒埴輪に近い形をしています。五條猫塚古墳の埴製枕は、埴輪と同一の工具を使用して作成されたことが分かっていることから、おじょか古墳の埴製枕も埴輪製作者によって作成された可能性が高いと言えます。



指定年月日:2002(平成14)年3月18日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)

志摩町御座にある御座白浜海水浴場の北の端に位置する地蔵貝塚で、1957(昭和32)年に行われた護岸工事によって多量の土器や人骨とともに出土したとされています。片側に刃が付けられた大刀で、切っ先の部分は折れており、残されている長さは29.5cmです。鞘口装具と呼ばれる刀を入れる鞘の口の部分と把縁装具と呼ばれる手で握る把のツバの部分の飾りがよく残っています。装具は鹿の角を削って作られています。大刀の刃の部分には木でできた鞘の痕跡がサビに取り込まれて残っていることから、鞘は木製の本体の口の部分に鹿の角で作った装具を取り付けたものであったことが分かります。

装具には直弧文という直線と円弧を組み合わせた、古墳時代に流行した文様が立体的に彫刻されています。鞘口装具の表面には、約1.5cmの幅で、直弧文が帯状に刻まれており、把縁装具の突起部分の上下面にも直弧文が刻まれています。刻まれた直弧文の隙間には赤色の顔料が残されており、もともとは装具全体が赤色に着色されていた可能性があります。欠損部分はあるものの、残存部位は保存状態も極めて良好であり、精巧な直弧文を刻んだ装具は工芸的に優れたものであることから、古墳時代の工芸技術を考えるうえで重要な資料と言えます。



指定年月日:1978(昭和53)年2月6日

所在地:志摩町越賀532

木造平屋建、瓦葺、1851(嘉永4)年

木造^{さんがわらぶき}棧瓦葺、正面起り破風入母屋造、背面切妻造、平屋建で一部2階がある農村舞台建築です。見物席は舞台前の広場で露天です。1831(天保2)年に土地を^{きりづまづくり}買い入れ、1849(嘉永2)年5月上棟、1851(嘉永4)年に落成しました。今も上棟の際の^{むなふだ}棟札が残っています。床下には廻り舞台のロクロ組がそのまま保存されています。正面2階に太夫座の出小屋を、階下^{はやしかた}に囃子方の席を置いています。

毎年秋には、地元青年団により演芸会が催され、今も地域に愛されています。幕末の頃、志摩の各村では歌舞伎や地芝居が盛んになり、村々で舞台が作られました。かつては大王町の船越の舞台(建築年:1857(安政4)年)や阿児町の立神薬師堂(建築年:1864(元治元)年)などがありましたが、志摩市に現存するのは越賀の舞台だけです。なお、船越の舞台は神奈川県の川崎市立日本民家園に移設され、国の重要文化財(建造物)に指定されています。



指定年月日:1971(昭和46)年3月17日

場所:波切神社(大王町波切1)

わらじ曳きは9月初めの^{さる}申の日(3回あるときは中の申の日)に波切神社の拝殿で行われます。

神事の3日前に漁師たちが編むわらじは、長さ約2.3 m、幅約1.5 m、重さ約100kgで、昔より少し大きくなっています。

当日は、早朝から使者の1人が拝殿で神様と朝食を摂り、大王島への参拝、神主による^{のりと}祝詞、そしてわらじと関係者全員の^{はら}祓い清め、と続いていきます。その後、^{みこ}巫女の舞が奉納され、続いて5人の^{ちこ}稚児による「^{さいもん}祭文」に合わせた舞が奉納されます。5人の稚児は、わらじの鼻緒に結んだ木綿の綱を持ち、力を合わせて山の方(西側)から海の方(東側)に向かってわらじを曳き、神事は終了します。

一連の神事を終えると、わらじは若者4人に^{かつ}担がれて、神社下の須場の浜まで運ばれ、七人婆さんの祝い唄「エレワカ」の後、海へ流されます。

祭りは約300年前から伝えられ、(江戸時代の古文書には平安時代を始まりとした記述もあり、800年以上前から続いているという説もあります。)昔、八大龍王(「大王町」の名前の由来)に追われて波切にやってきた一つ目の鬼神(ダンドラボッチ)が大奥島(大王島)に住んでおり、村にやってきては悪さを繰り返したので、村びとが相談して一丈のわらじ片足と赤飯を流したところ、鬼神が恐れて逃げたという説話に基づくと伝えられています。



指定年月日:1995(平成7)年3月13日

場所:立神コミュニティ倉庫(阿児町立神2631)

8月14日と15日の夜、阿児町立神地区のコミュニティ倉庫の広場(旧薬師堂前広場)で5年に一度先祖供養、新亡者の供養のために行われる大念仏行事です。「陣ばやし」・「ささら踊り」・「なむで踊り」の三部構成で、その中心がささら踊りであることからこの名称になりました。中間年には「陣ばやし」だけが行われます。

まず提灯を持った保存会会長を先頭に、露払い、音頭とり、大童、小童(太夫ともいう)、太鼓もち、太鼓うち、笛、高張提灯、かさぶく、長提灯で列をなし、道中歌を唱えながら広場へ繰り込み、総牌(新亡者を祀る灯籠)の前で念仏を唱えます。これが入場の儀式「陣ばやし」です。

続いてカンコ、棒振り、貝吹き、山伏のほか大ザサラ、小ザサラなどが入場します。

広場に入ったあと、赤熊を背中に付け、頭に獅子頭のようなものを被った3人のカンコは、胸につるした羯鼓を2つのパチで打ちながら踊ります。棒振りは、小石を入れた長さ2mほどの竹の棒をガラガラ鳴らして歩き回り、見物の人が輪の中に入るのを防ぎます。黒装束でスゲ笠を被った大ザサラは中学生が務め、花笠を被った小学生の小ザサラたちと一緒に「踊りこみ」「こおどり」「綾おり」「長拍子」「こきりこ」「引き踊り」の6種類に分かれて円陣を組み、踊り歌に合わせてササラやコキリコを打ち鳴らしながら踊ります。

最後に総牌の前に集まり、全員で念仏を唱えて終了します。

起源は不明ですが、赤熊の板部に1805(文化2)年と記されていることから、この頃には既に行われていたことが分かります。



指定年月日:1936(昭和11)年1月22日

所在地:阿児町国府3476

741(天平13)年、聖武天皇は仏教による国家鎮護^{ちんご}のため、当時の日本の各国に国分寺^{こんりゅう}の建立を命じました。国家の事業として開始された国分寺建立ですが、広さや建物の配置は国によって大きく異なることが分かっています。

志摩国分寺については、発掘調査などが行われておらず、はっきりとした場所は分かりませんが、古代の瓦が出土していることから、現在の国分寺周辺に建てられていたと考えられています。また、国分寺がある阿児町国府は古代の国府所在地^{こくふ}とも考えられていることから志摩国の政治と宗教の中心地が国府地区周辺にあったと考えられます。

志摩国は下国^{げこく}であり、国分寺の費用をまかなうのが難しかったようで、伊勢国、三河国、尾張国の税を修繕、維持に充てていました。『日本後紀』には、809(大同4)年に国分僧寺と国分尼寺を伊勢国分寺に移したと記されており、志摩国分寺は廃絶したと考えられます。

現在は、市指定有形文化財(建造物)の国分寺本堂が、範囲内に建てられています。



指定年月日:1937(昭和12)年7月2日

所在地:浜島町浜島1416 ※

熊野灘に面した丘陵上にある古墳群で、現在では旅館などの間に散在する状態で古墳が残されています。直径10～16m程度の円墳が15基ありましたが、崖崩れや開発によって、既に失われてしまったものもあります。いずれも6～7世紀に造られたものと考えられます。

7号墳には奥行き約4.8m、幅約2.5mの玄室（死者を埋葬する部屋）を持つ比較的大きな横穴式石室が開口しています。天井石の1つが落下してしまっていますが、そのほかの部分はよく残されています。奥壁から見て羨道（玄室に至る通路）が左側に片寄って取り付けられた右片袖式の石室で、玄室と羨道との境界は明瞭であり、近畿中央部に一般的な石室の形態に近いものです。石室は長く開口していたようで、地元では鬼が住むところとして「鬼のガロ」と呼ばれていました。また、4号墳の周辺では子持勾玉が採集されたとされています。

志摩地域の古墳時代の社会のあり方を考えるうえで重要な古墳と言えます。



指定年月日：1964(昭和39)年10月16日

所在地：志摩町越賀602

木造2階建、本瓦葺、1766(明和3)年

戦国時代の豪族である越賀氏の城とされる越賀城跡がある城山のすぐ下に位置しています。敷地内に2棟ある建物の手前側の建物で、奥の建物は古文書の収蔵庫として使われています。近くには県指定有形民俗文化財の越賀の舞台があります。

木造本瓦葺切妻造の土蔵で、主に松材を使い、樺材を混用しています。外部は全体に下見板を張り、南向きの正面2ヶ所に入り口を設けて、^{さんがわらぶき ひさし}棧瓦葺の庇を取り付けています。窓は東側に1つあるだけです。大きさは間口9.4m、奥行13.8mです。^{むなふだ}棟札から1766(明和3)年に建てられたことがわかります。

年貢米を鳥羽藩に納めるために一時収納した倉庫で、不時の救助米の保管にも使われたようです。



指定年月日: 1969(昭和44)年3月28日

所在地: 阿児町志島512-1

阿児町志島にある志島古墳群の11号墳で、古墳群の中で最古の5世紀中ごろに造られました。豪華な副葬品を持つ古墳としては、志摩地域でも最も古い古墳と考えられます。志島集落の最も高い場所に位置しており、墳丘の上からは海を見渡すことができます。古墳の周囲は削り取られており、古墳のかたちは分かりません。1967(昭和42)年に発掘調査が行われ、多くの遺物が出土しました。埴輪も出土していることから、当時は墳丘の上に埴輪が立て並べられていたと考えられます。

緑色千枚岩^{りょくしよくせんまいがん}で築かれた横穴式石室^{よこあなしきせきしつ}は、入口から奥に向かって広がる羽子板形の玄室^{げんしつ}(死者を埋葬する部屋)とハの字形に広がる前庭部(玄室前の空間)を持ち、玄室の壁際には石障^{せきしょう}と呼ばれる板石^{いたいし}が置かれています。北部九州の石室に類似しており、石室の製作に北部九州の人物が関わったと考えられます。

副葬品には、近畿中央部からもたらされた短甲^{たんこう}(胴のよろい)や朝鮮半島製の錫^{すず}の装具^{てつどう}が付けられた鉄鉾^{てつぽく}(やりの先端部)のほか、県指定有形文化財の埴製枕^{はにせきまくら}や銅鏡、鉄刀、鉄剣、鉄鏃^{てつぞく}、農具、多様な玉類などが含まれています。

石室と副葬品のあり方から、さまざまな地域と結びつきを持った人物の墓であることが分かります。



指定年月日:1936(昭和11)年1月22日

所在地:和具大島(志摩町和具)

志摩町和具漁港から南方約3kmの海上にある和具大島は、指定を受けた当時は、東西に約350m、南北に約150mの長楕円形の無人島でしたが、長年、波浪や風雨による風化浸食を受け、現在は、三角形のような形をしています。島の東側と西側の両端には、高さ10～15mほどの小さな丘があり、その間は、防波堤が築かれ、北側に砂浜が広がっています。丘には、ウバメガシやヤブツバキ、トベラ、ハマヒサカキなどの低木がよく茂り、これらの樹木には、つる性のツルトウカズラなどが絡みつき、地表にはツワブキやオニヤブソテツなどの草本植物がみられます。島の北側の砂浜には、百株以上のハマオモト（ハマユウ）が群生し、その間にハマウドが混生するほか、ハマグルマ、ハマアザミ、ハマニガナ、キノクニシオギク、ハマボウフウ、ハマエンドウ、イヨカズラ、ハマヒルガオなども群落を形成しています。また、近年は、クズや、北米原産のアツバキミガヨランの生育が認められ、これらの侵入植物の対策が課題のひとつです。



指定年月日:1938(昭和13)年4月7日

所在地:浜島町浜島682ほか

浜島町浜島の集落の南側に位置する宮山の森にあります。宇気比神社や恵比須神社のある宮山は、タブノキやヤブニッケイ、オガタマノキ、ホルトノキ、ツゲモチ、ヒメユズリハ、クスノキ、スダジイなどの温暖な気候の海岸沿いの地域に生育する暖地性の常緑広葉樹が自生しています。昔から、信仰の対象の場所として大切に守られてきました。しかし、宇気比神社の樹叢は、1959(昭和34)年の伊勢湾台風で大きな被害を受け、社殿前方の傾斜面は荒廃しました。現在は、スギやヒノキが植林され、天然記念物指定当時の植物はみることができません。社殿背後の台地は、海からの塩分を含んだ風の影響を直接に受けるため、植物群落が荒廃し、カラスザンショウなど二次林にみられる植物が目立ちます。



23

市指定有形文化財(建造物)

せきぞうほうきょういんとう
石造宝篋印塔

指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:阿児町国府1164

阿児町国府集落西の山頂に所在する、高さ126cmの硬質砂岩製の宝篋印塔です。相輪から基礎までほぼ完全な形で残っています。相輪上部の請花は単弁八葉、九輪は沈線で表現され、下部の請花は複弁八葉です。笠は上5段、下2段で隅飾が二弧輪郭式でやや外傾します。塔身の円相内には金剛界四仏の種子(梵字)が刻まれ、円相の下には請花が線刻されています。基礎の上部は四隅主弁・側面は重弁・複弁の主弁1葉と間弁2葉となる反花で、基礎の下部側面には杵取り内に格狭間が彫られています。

銘文などはありませんが、15世紀前半の特徴をもつもので、南北朝時代から戦国時代にかけて志摩国内にも多く建立された硬質砂岩製の宝篋印塔を代表するものです。



24

市指定有形文化財(建造物)

せきぞうごりんとうぐん
石造五輪塔群

指定年月日:1972(昭和47)年3月31日

所在地:妙音寺(阿児町甲賀2266)

阿児町甲賀集落内の妙音寺境内に所在します。石塔群は五輪塔の空風輪・火輪・水輪・地輪(花崗岩製、硬質砂岩製、軟質砂岩製)、二石五輪塔、宝篋印塔の相輪・笠・基礎(硬質砂岩製、いずれも別個体)からなっています。このうち、二石五輪塔の地輪には「(アク) 峯天正八年 前三勅大 守慶山太 公居士覺子 寅正月十一日」の銘文があり、1580(天正8)年に造られたことが分かります。市指定有形文化財(建造物)の大王町波切の石造五輪塔群とともに二石五輪塔の年代を示す貴重な資料です。

また宝篋印塔の相輪は、先端のみしか残っていませんが、南北朝時代から室町時代前期のものであり、志摩国における宝篋印塔の導入を示す貴重な資料です。石塔群は覆屋に収められ、大切に保存されています。



25

市指定有形文化財(建造物)

しまこくぶんじほんどう
志摩国分寺本堂

指定年月日:1990(平成2)年6月25日

所在地:国分寺(阿児町国府3476)

木造平屋建、瓦葺、1843(天保14)年

10世和尚の義純^{ぎじゆん}が1837(天保8)年に本堂再建を起工し、7年の歳月と1,161両の工費をかけ、1843(天保14)年に完成しました。1843(天保14)年の棟札には「工匠長名古屋住竹中和泉輔正敏 門人手替志州的矢住中村九蔵治長^{むなふだ}」と書かれています。

義純は絵画にもすぐれ、花鳥龍虎^{かちょうりゆうこ}が得意であったと世代記に記されており、本堂建造物にはきわめて精巧な彫り物がありますが、これらはほとんど義純が彫刻したものです。

毎年5月8日は、花まつりで賑わいます。県指定史跡の志摩国分寺跡の中に立てられており、本尊は県指定有形文化財(彫刻^{まきがき})の薬師如来座像です。伝統的建造物群や横垣の美しい「志摩市景観計画重点候補地区」にあります。



26

市指定有形文化財(建造物)

せきぞうごりんとうぐん
石造五輪塔群

指定年月日:1996(平成8)年12月6日

所在地:仙遊寺(大王町波切6)

大王崎の近く、仙遊寺の境内には、戦国時代の九鬼氏の供養塔とされる5基の五輪塔があります。五輪塔は、すべて硬質の砂岩製で、地輪一石と空風火水輪一石からなる二石五輪塔です。1号塔は高さ約57.5cm(台座を含む、以下同じ)で、空風輪と台座は別個体のもので補われています。地輪正面には「天文□年(ア)仙□□月□日」と記されています。2号塔は高さ約84.2cmで、地輪と台座は別個体のもので補われています。地輪が失われているため、銘文などは確認できません。3号塔は、高さ約79.9cmで、地輪正面に「天文十年(1541)(ア)星隠 正月五日」と記されています。4号塔は、高さ約80.5cmで、地輪正面に「天文廿年(1551)(ア)泰雲 七月廿二日」と記されています。5号塔は、高さ約73cmで、銘文はありません。松阪市南部から南伊勢町までに広く分布する二石五輪塔の成立期の資料として貴重なものです。



27

市指定有形文化財(彫刻)

木造大日如来坐像

指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:見宗寺※

像高110cm、^{よせぎづくり}寄木造、鎌倉時代前期

見宗寺の本堂向かって右に建つ大日堂の本尊で、^{むねまえ}胸前で^{ちけんいん}智拳印（左手人差し指を右手で包み込む）を結んだ金剛界の大日如来坐像です。^{もとどり}髻を結いあげて^{ほうかん}宝冠を戴き、^{じょうはく}条帛、^{くん}裙を着けます。また、^{きょうしよく}胸飾や^{わんせん}腕釧、^{ひせん}臂釧などの装身具を身にまといますが、これは如来像の中でも大日如来の特徴です。

寄木造と思われますが、後世の彩色が全体を厚く覆っているため、寄木の詳しい構造は不明です。鎌倉時代前期の作と考えられていますが、作風には平安時代後期^{よふう}の余風が割合強く感じられます。

もともと国府の国分寺に祀られていましたが、中世の頃に甲賀と国府の境にある「大日山」に移され、甲賀の漁民から信仰を集めていました。明治になって、大日堂とともに見宗寺に移り、現在に至っています。



28

市指定有形文化財(彫刻)

木造薬師如来坐像

指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:安乗寺※

像高88cm、^{よせぎづくり}寄木造、平安時代後期

ほぼ等身大の大きさで、^{れんげざ}蓮華座に座る一般的な如来像の姿です。ヒノキ材の寄木造と思われませんが詳しい構造は不明です。後世の修理によって、わずかに像容を損じている部分もありますが、修理はあくまで表面的なもので、造形の基本的な部分にまではおよんでいません。指定時には鎌倉時代の作とされていましたが、穏やかな表情や浅くあらわされた衣文線には、少し前の平安時代後期の特徴がうかがわれます。

もと安乗にあった西明寺の本尊と伝えられ、明治末期の四ヶ寺合併に伴って安乗寺境内の薬師堂に移されました。さらに近年の本堂新築に際して移動し、現在は客仏（他の寺から移された像）として本堂内に安置されています。



指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:神明神社(阿児町神明23-1)

総高92.0cm、石造、南北朝時代(1339(暦応2)年)

自然石に種字(梵字)を彫刻したもので、曼荼羅石と呼ばれています。もとは神明神社の別当寺である文殊寺に建っていたと伝えられています。

正面には文殊菩薩の梵字を中心に多くの梵字があることから「八字文殊曼荼羅」といわれ、背面には金剛薩埵を中心とした金剛界曼荼羅理趣会を、右側面上部には一字金輪仏頂、下部には胎蔵界曼荼羅中台八葉院をあらわすなど、他に類例がないといわれます。また、左側面には「文殊開山 沙門朝聞 暦応二乙卯年正月十八日」と刻印されているといわれ、暦応2年は南北朝時代の北朝の年号で、1339年にあたります。

このように貴重な曼荼羅石ですが、現状は全体に摩滅し、また、後世の覆屋が周囲を覆うため、梵字・年号ともに確認することが非常に困難となっています。



指定年月日:1980(昭和55)年3月31日

所在地:少林寺(阿児町立神2051)

仏足石とは、ブツダ(釈迦)の足跡の形を石に彫りつけたもので、仏像が制作される以前には、菩提樹や法輪などとともにブツダを象徴するものとして礼拝の対象になっていました。わが国では、奈良県の薬師寺のものが最古とされています。

少林寺の仏足石は観音堂の右前にあって、扁平な足の形を印刻し、これに千輻輪相と呼ばれる車輪の文様や卍などを刻んでいます。やや摩滅していますが、江戸時代の作かと思われます。県内には、いくつかの仏足石が知られていますが、志摩地方に残る代表的な作例として注目されます。



指定年月日:1980(昭和55)年3月31日

所在地:少林寺※

木造聖観音立像

像高215.0cm、^{いちぼくづくり}一木造、素地、江戸時代(1674(延宝2)年)

阿児町立神の少林寺境内に建つ観音堂の本尊で、少林寺の円空仏の中で最も大きく、また、志摩地方でも最大の大きさを誇ります。節のあるやや曲がったサクラの原木をほぼそのままの状態で用い、幹の一部に顔を彫刻します。まるで木の中からゆっくりと仏があらわれてくる、その一瞬を写し取ったかのような印象さえ感じられます。下の木造護法神立像と同様に、材は必ずしも彫刻に適したものとは思えず、この材自体に何か意味があるのかもしれません。江戸時代の書物である『近世^{きじん}畸人伝』に、はしごをかけて^{なた}鉈を持ってよじのぼり、^{たちき}立木に彫刻する円空の姿を描いた絵がありますが、まさにそのような状態で制作されたことが想像される仏像です。



木造護法神立像

像高91.5cm、^{いちぼくづくり}一木造、素地、江戸時代(1674(延宝2)年)

近年に発見された護法神と呼ばれる像で、樹皮のついた節の多い木材に、目や口といった最低限の彫刻を施して姿をあらわしています。下の部分^{ふきゅう}が腐朽してほとんど空洞になっており、材料となった木材は、必ずしも仏像を彫刻するのに適しているとは思えません。あるいは、この木材自体に何か^{れいぼく}霊木的な意味合いがあるのかもしれません。なお、本像の下部に見られる丸みをおびた形状が、立神の紙本墨書大般若経(県指定有形文化財(書跡・典籍))第1巻ほかの見返しに描かれた像の脚部に見られる表現に、よく似ている点を指摘しておきたいと思います。



木造観音立像

像高58.7cm、いちぼくづくり一木造、素地、江戸時代（1674（延宝2）年）

少林寺の3体の円空仏の中で最も小さな像です。ほとんど朽ちかけた細長い板状の木材を使用し、体部はその割れ肌をそのまま活かしています。顔は平面に整えて眉や眼を細い線であらわし、鼻や口を彫刻しています。同様の像が、近隣の個人宅にも伝来しています。即興的とも思える彫像ですが、作者円空の研ぎ澄まされた造形感覚がうかがえます。まさに円空にしか造りえない、信仰に根ざした「かたち」といってよいでしょう。



32

市指定有形文化財(彫刻)

もくぞうによらいぎようざう
木造如来形坐像

指定年月日:1994(平成6)年11月29日

所在地:龍泉寺※

像高28.0cm、^{よせぎづくり}寄木造、^{こしよく}古色、平安時代末～鎌倉時代初期

龍泉寺に客仏(他の寺から移された像)として伝来したもので、現在、両手先を失っているために印相がわからず、釈迦や阿弥陀といった尊名が特定できません。

材質はヒノキで、複数の材を組み合わせた寄木造の技法が用いられています。表面は、黒っぽい古色となっていますが、もとは^{しつぱく}漆箔が施され金色に輝いていたものと考えられます。両手先のほかに右腰部の三角材や耳の一部などが失われ、台座も後世のものに変わっています。しかし、穏やかな表情や浅く整えられた衣文に当初の作風が感じられ、制作は平安時代末から鎌倉時代初期(12～13世紀)になると考えられます。伝来についてはよくわかりませんが、小像ながら当地の歴史を考えるうえでも重要な作と言えます。



33

市指定有形文化財(彫刻)

もくぞうじゅういちめんかんのりんりゅうざう
木造十一面観音立像

指定年月日:1994(平成6)年11月29日

所在地:福壽寺※

像高78.3cm、^{いちぼくづくり}一木造、平安時代末～鎌倉時代初期

福壽寺の境内に建つ観音堂の本尊で、現在、^{ぶつめん}頂上仏面を除いた頭上面をすべて失っていますが、頭部にその痕跡が残ることから、当初は十一面観音像であったことがわかります。

^{すし}厨子内に直立し、左手は腕を曲げて^{れんげ}蓮華(欠失)を握り、右手は緩やかに垂らしておそらく^{ねんじゆ}念珠(欠失)を持っていたと思われます。頭部と体部を一材から制作(一木造)し、内刳は施していません。後世の彩色が厚手に施されています。また、伝来については不明です。

制作時期は、平安時代末から鎌倉時代初期(12世紀)と考えられており、比較的小像でありながら注目されます。



指定年月日:1994(平成6)年11月29日

所在地:玉泉庵(磯部町迫間671)

像高 閻魔王^{えんま}71.5cm、他の9体53.1~58.5cm、脱衣婆(残欠)27.5cm、司命49.2cm、司録43.0cm、各木造、室町時代(閻魔像墨書銘:1515(永正12)年)

玉泉庵の十王堂には、室町時代の閻魔王以下の十王像10軀と脱衣婆の残欠1軀が現在一具で伝来します。また、別に作風と制作時期を異にする司命・司録像が伝わり、これらをあわせた13軀が、現在、志摩市の文化財に指定されています。

十王は、いずれも道服を着て笏^{しやく}を持ち、上方に開いた冠を戴いて忿怒相^{ふんぬそう}にあらわされます。しかし、残念ながら破損や摩滅などにより像容はあまり定かではなく、さらに脱衣婆像は火災に遭ったものか大きく破損し、頭部と胸部を失っています。

閻魔王像の像底には、「永正十二年七月」の年紀を含む墨書銘があり、また、一方で「永享十一年十二月」の異筆の銘があるものも認められます。おそらく、この一群の像は1439(永享11)年につくられ、その後1515(永正12)年に彩色を含めた大規模な修理を行ったものではないかと推測されます。

いずれにしても本像は、室町時代の在銘作品として、また一具十体を揃えた十王像の作例として資料的に注目されます。



指定年月日:1994(平成6)年11月29日

所在地:薬師堂(磯部町五知604-1)

像高 薬師如来109.5cm、両脇侍89.5cm、各一木造、素地、江戸時代(1974(延宝2)年頃)

上五知の集落を見下ろすようにして建つ薬師堂の本尊として安置されます。堂は朝熊山へ向かう道(岳道)沿いにおいて、円空が朝熊山登山の途中で制作したとの伝承があります。三尊とも、台座に至るまでをスギと思われる針葉樹の一材から彫成し、特に両脇侍は一本の材を縦二つに割り離して、それぞれを彫刻します。中尊の薬師如来は、胸前で大きな薬壺を両手で捧げ持つようにして直立する姿で、顔と体の向きがややずれており、体を正面にすると顔がわずかに右を向くように制作されています。眼は直線であらわされ、頭部と胸部の奥行きは浅くつくります。左脇侍(日光菩薩)は四角い顔に横長の眉や眼を配し、両足先を彫り出します。右脇侍(月光菩薩)も四角い顔にやや粗い目鼻をあらわしますが、両足先は造りません。このように三尊としての調和を保ちつつも、三体の面貌表現が異なるなど、それぞれ個性の強い一面も見られます。円空が志摩地方を訪れた1674(延宝2)年頃の作と考えられ、伊勢志摩地方に残る円空の代表作の一つです。



36

市指定有形文化財(彫刻)

木造薬師如来坐像

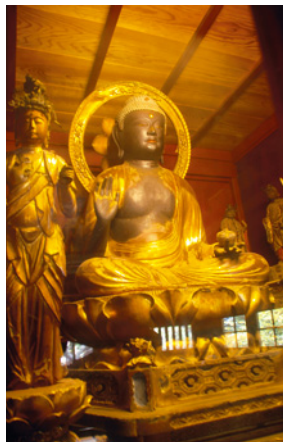
指定年月日:1996(平成8)年12月6日

所在地:波切氏仏教会(大王町波切412)

像高90.0cm、^{よせぎづくり}寄木造、平安時代後期～鎌倉時代初期

波切氏仏教会本堂の本尊で、衲衣^{のうえ}を左肩にかけて着用し、左手に薬壺^{やっこ}を持って蓮華^{れんげざ}座上に坐る薬師如来像です。制作時期の異なる両脇侍^{りょうきようじ}(日光・月光菩薩)と十二神将が従います。

構造は寄木造かと思われますが、後世の彩色によって表面が健全に保たれており、寄木の詳しい状況がわかりません。また、彫り直しと思われる箇所がありますが、それらはあくまでも表面的なもので、造形の骨格にまではおよんでいません。従来、鎌倉時代の作とされていましたが、平安時代後期の様式も感じられ、おそらく12世紀末から13世紀初めにかけての制作と考えられます。当地域の仏教信仰を考える上で、注目される仏像と言えます。



37

市指定有形文化財(彫刻)

木造聖観音立像

指定年月日:2004(平成16)年8月23日

所在地:三蔵寺(志摩町片田2665)

像高156.2cm、^{いちぼくづくり}一木造、江戸時代(1674(延宝2)年頃)

ほぼ等身大の大きさで、やや大きめの頭部に^{けぶつ}化仏(頭上の小像)をあらわし、左手に蓮華を持って踏み割り蓮華の上に直立する姿です。正面は、化仏や天衣などを円空らしい彫り口であらわしますが、背面は彫刻をせず、板状になっています。また、頭部背面に納入物^{しやり}(舍利)を入れる工夫がされてあるのも本像の特徴です。

1674(延宝2)年に志摩地方を訪れた円空の作風の変化をうかがうことができる志摩地方を代表する円空仏の一つと言えます。



指定年月日:2006(平成18)年7月20日

所在地:明王院※

像高86.4cm、^{よせぎづくり}寄木造、平安時代後期

明王院本堂の本尊で、衲衣を左肩にかけて着用し、^{のうえ}薬壺^{やっこ}を持って坐る一般的な姿の薬師如来坐像です。

ヒノキ材の寄木造で、後世の修理に伴い、造像当初の雰囲気^{のうへ}が幾分損なわれている点が惜まれます。しかし、それらはあくまでも表面的なもので、本像が持つ造形的な骨格は保持されており、制作は平安時代後期、11世紀後半と考えられます。

本像は、1595(永禄4)年に「度会郡田曾之領小田名ト申ス浜」へ漂着し、その後、様々な経緯を経て当地に伝来したものとされます。

本像は、志摩市の仏像の中でも比較的古い部類に入るもので、志摩町和具観音堂の木造十一面観音立像に次ぐ時期の像と考えられます。志摩の仏像史の中で重要な作例と言えます。



指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:安乗寺※

直径30cm

この鱈口は、以前に安乗にあった西明寺境内の薬師堂に^か懸けられていました。現在は安乗寺本堂に保管されています。「永禄三庚申年九月十三日阿苔西明寺」と銘文が印刻されており、室町時代の1560(永禄3)年に制作されたものと考えられます。ただ、願主や作者などの名前はなく、制作の詳しい背景などは不明です。

西明寺は、同地の^{ごりょう}御霊神社^{べつとうじ}別当寺で真言宗の寺院でした。明治末期の安乗村の四ヶ寺統合により安乗寺に薬師堂とともに移され、現在に至っています。



40

市指定有形文化財(工芸品)

てつせいほうしん
鉄製砲身

指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:安乗神社(阿児町安乗842)

幕末、江戸幕府は黒船来航に備えて、鳥羽藩と津藩に伊勢神宮と伊雑宮の防衛を命じました。志摩地域の沿岸部にも点々と台場が整備され、大砲が設置されました。この鉄製砲身は、安乗岬にあった日^ひ和^{より}山^{やま}台場に設置されていたものです。全長は171cm、胴回りは最大部で118cmで、中央部に鳥羽藩主稲垣家の家紋である抱^だ茗^き荷^{やうが}が浮彫^{うきぼり}されています。



41

市指定有形文化財(工芸品)

わにぐち
鰐口

指定年月日:1996(平成8)年12月6日

所在地:波切氏仏教会(大王町波切412)

直径28cm、厚さ15cm

この鰐口は、波切氏仏教会の構内にある薬師堂の正面に懸^かけられています。銘文から、江戸時代の1659(万治2)年に制作されたものとわかります。

銘文は次のように印刻されています。

「萬治二年七月八日 冶工^{やこう}藤原越後守重種^{いもじ}薬師堂奉寄進衆泉住隣仲桂昌本 願森岡長兵」

「冶工」は鋳物師、つまりこの鰐口の作者のことで、「藤原越後守重種」は他の資料などから「辻重種」という人物であることがわかります。辻氏は安濃津を拠点に活躍していた鋳物師で、重種は兄の吉種とともに津市岩田橋^{いわたはし}の擬宝珠^{ぎぼうしゅ}をはじめ、多くの作品をつくりました。この鰐口制作の前後には、津市や鈴鹿市で仏像^{ぼんしやう}や梵鐘^{ちゆうそう}の鋳造を手掛けており、今も比較的多くの作品が残っています。



42

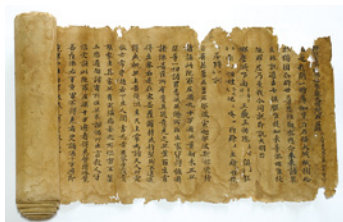
市指定有形文化財(書跡・典籍)

しほんぼくしよだらにきよう
紙本墨書陀羅尼經

指定年月日:1972(昭和47)年3月31日

所在地:国分寺※

本紙の全長約817cmの紙本墨書の卷子本で、平安時代の写経とされています。この経典は、正式には「仏説七俱胝仏母准提大明陀羅尼經」と呼ばれます。国分寺の本尊である県指定有形文化財(彫刻)の薬師如来坐像の台座から発見されました。国分寺は1485(文明17)年に中興されたといわれ、薬師如来坐像は1507(永正4)年の造立であることから、本経典もこの時期に納められたという想定もできます。この頃、国分寺は、真言、禅、浄土系の影響下にあったものの、江戸時代中期に入寺した幸威により江戸の寛永寺末寺となり天台宗になりました。現在は天台宗比叡山延暦寺末ですが、この経典は真言や禅が混然一体となった中世の国分寺の様相を伝えているのかもしれませんが。なお、1814(文化11)年から住職を務め本堂再建に尽力した僧に義輪がいます。1829(文政12)年に義輪はこの経典に弘法大師筆であると記しており、当時そのような伝承があったことがわかります。



43

市指定有形文化財(古文書)

うがたむらもんじょ
鵜方村文書

指定年月日:1976(昭和51)年4月30日

所在地:志摩市立図書館(阿児町神明1074-15)※

鵜方村に関する1594(文禄3)年から明治期に至る約600点の文書群で、旧鵜方村役場の倉庫にあったものです。1594(文禄3)年の太閤検地帳の写、その後の田畑水帳写、新田水帳、立毛帳、名寄帳などの土地関係資料、領主交代時に作成され当時の村の概況が記された指出帳、1633(寛永10)年から1871(明治4)年に至るまでの年貢割付状が残されており、豊臣政権期から江戸時代にかけての鵜方村の土地や年貢の状況をひもとくことができます。ほかに、借用証文、居住地移動の書類である宗旨改送り一札、漁場争論や伊雑宮御師に関する文書なども収められています。

『三重県史資料編近世1』に太閤検地帳が「英虞郡鵜方村検地帳」として、『三重県史資料編近世3(下)』には「鵜方役場保管文書」として一部が翻刻されており、江戸時代の鵜方村をうかがえる資料として活用されています。



44

市指定有形文化財(古文書)

しものごうむらみずちよう
下之郷村水帳

指定年月日:1999(平成11)年12月24日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)※

表紙に記された「水帳」とは、「御図帳」のあて字とされ、検地帳を指す用語です。同じく表紙に記された文禄3年(1594)10月19日は豊臣政権期にあたり、太閤検地の中で作成された帳面とわかります。印や署名がないため写と考えられます。上段に地名と、上田、中田、下田、下下田、上畠、中畠、下畠、下下畠などの土地の種類と等級が、その下に土地の面積、石高、名請人が記されています。名請人の一部には、恵利原、上之郷、五知、迫間、穴川、山田といった近隣の集落名が付され、他村の人びととの土地関係もわかります。田、畠、そして最後に屋敷地がまとめられています。屋敷地の名義を見てみると、神楽衆や祢宜、「やくしだう」、冷泉庵、如意寺、清住庵、慈航庵などの宗教に関連する名称も確認できます。

『磯部町史上巻』に「文禄三甲午下之郷村水帳」として翻刻が収められています。



45

市指定有形文化財(古文書)

くつかけむらとうやもんじょ
沓掛村禰屋文書

指定年月日:1999(平成11)年12月24日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)※

神事の中心となる「禰役」(頭役)の人名を、年々書き上げていった文書です。「しあけとうの日記」と「禰文」からなり、もとは沓掛地区で保管されていました。「しあけとうの日記」は1537(天文6)年から1608(慶長13)年、1624(寛永元)年から1775(安永4)年、1798(寛政10)年と断続的な記事が収められ、中世志摩国の人びとの活動がうかがえる重要な資料となっています。一方、「禰文」には1686(貞享3)年から1875(明治8)年までの禰役のみならず、地震、火災、風水害などの災害、年貢の状況、富士山噴火やおかげまいりといった記述も含まれています。冒頭には本書の由来が記され、1779(安永8)年に薬師堂が焼失し、置かれていた御獅子と1529(享禄2)年以来の「産子生神禰文」が焼け、別に残されていた記録から粗々認めたと書かれています。なお、両文書の重複部分は対照可能です。「しあけとうの日記」は大部分が『三重県史資料編中世2』に「神事当番帳」として、「禰文」は『磯部町史下巻』に収められています。



46

市指定有形文化財(考古資料)

わどうかいちん
和同開珎

指定年月日:1994(平成6)年11月29日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)

708(和銅元)^{ちゅうぎゅう}年に鑄造開始された貨幣で、日本で最初に流通した貨幣と考えられています。表面には「和同開珎」の4文字が右回りに表され、裏面は無文です。直径約24.5mmで中央には一辺約6.5mmの四角い穴が開いています。磯部町飯浜集落の東端の海岸地に位置する飯浜貝塚で出土した2点が指定されています。貨幣を使用した物流が早い段階で志摩地域にも伝わっていたことを示す資料として重要です。



47

市指定有形文化財(考古資料)

がもんたいかんじょうにゆうしんじゅうきょう
画文帯環状乳神獸鏡

指定年月日:1996(平成8)年12月6日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)

^{どうけいきょう}同型鏡群と呼ばれる、中国で製作され、5世紀に倭^わの五王による外交で倭(日本)にもたらされたと考えられる鏡の1枚です。大王町波切の塚原古墳で出土しました。埼玉県の稲荷山古墳のほか群馬県、千葉県、福岡県、宮崎県の古墳で同様の文様の鏡が見つかっています。直径15.3cmで、中国中～南部産の鉛を含んでいます。細長く伸びた四頭の獣はくがの胴の上にしょうしき伯牙・こうてい鍾子期、とうおうふ黄帝、せいおうぼ東王父、しんせん西王母といった神仙をのせた文様が描かれています。



指定年月日:1996(平成8)年12月6日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)

1902(明治35)年に愛媛県に生まれ、1933(昭和8)年に大王町船越に転居して時計商を営んだ佐々木武門氏は、志摩郷土会に所属して、大王町を中心に多くの遺物を採集しました。総数7,468点にのぼる遺物の多くには、出土場所を示す注記が丁寧に書き込まれています。大王町の次郎六郎遺跡で採集された石器には、縄文時代初頭の有茎尖頭器や局部磨製石斧などが含まれており、その当時の人々の生活を伝えています。大王町の塚越貝塚では、動物の骨や鹿の角を加工して作られた、魚を取るためのヤスや小刀の柄などが見つかっています。また、古墳時代に朝鮮半島から日本列島に渡ってきた渡来人と関わりが深い人々が製作したと考えられる韓式系土器と呼ばれる甕の破片も見つかっています。

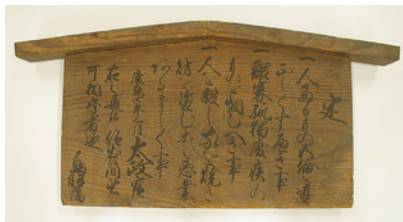


塚越貝塚の骨角器

指定年月日:1980(昭和55)年3月31日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)※

江戸時代から明治初期にかけて、幕府・藩や政府の法令は、板に墨書して町や村の高札場に掲示されました。これらは志島村の高札場に掲げられていたもので5枚を数えます。この内4枚の高札(制札)は、1868(慶応4・明治元)年3月に明治新政府の基本方針を人びとに示すために、旧江戸幕府の高札を撤去し、掲げられた太政官高札で、第一札では基本道德の遵守、殺人・放火・強盗の禁止が、第二札では徒党・強訴・逃散の禁止が、第三札ではキリシタンの禁制が説かれ、第四札では万国公法の尊重が、第五札では人びとの本国離脱の禁止が説かれており、志島では第一札から第四札のみの4枚が保管されていました。残る1枚は、1872(明治5)年4月に出された火附・盗賊・人殺し・賈金作りの禁止と告発を記した制札です。高札制度は、1873(明治6)年2月に廃止され、これらの高札もその役割を終えました。



指定年月日:2004(平成16)年8月23日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)※

御座村に^{かか}掲げられていた江戸時代の制札(高札)と考えられます。江戸時代、幕府・藩の法令は、板札に^{いたふだ}墨書して町・村の高札場に掲示されました。幕府の制札は公儀高札とよばれ、1682(天和2)年に出されたものが、1711(正徳元)年に増補修正され、忠孝(主君への忠義と親への孝行)・俚約・博奕(賭け事)の禁止などを説いた札、毒薬・^{にせ}贋薬・^{ちゆうこう}贗金銀・徒党などの禁止を説いた札、荷物運搬の賃金などを定めた札、キリシタン禁令の札、火付犯の逮捕などを説いた札の5枚の構成で継承されました。切支丹制札はこの内の1枚です。また、徒党制札は1770(明和7)年に幕府から追加で出されたもので、徒党・^{ごうそ}強訴・^{ちゆうさん}逃散の禁止と密告を説いたものです。なお、1868(慶応4・明治元)年3月、明治新政府により太政官の制札が設置されたことで、これらの制札は役目を終えました。



指定年月日:1994(平成6)年11月29日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)

磯部町の矢は的矢湾の北岸に位置し、江戸時代には廻船の風待ち港として、「小伊勢」と呼ばれるほどの繁栄をみせました。日和山は、東方の大的矢と西方の小的矢の2ヶ所があり、それぞれに方位石が設置されていました。

形状は共に花崗岩を円筒形に加工したもので、盤面の外周部に12区画を線で表わし、その中に十二支(方角)、中周部には東・西・南と線刻し、北は「○」で示され、中心部には真北を指す針形が刻まれています。盤面の直径は大的矢のものが30.5cm、小的矢のものが31cm、高さは共に円筒部が28.5cm、台石部は31cmで、側面に「灘廻船中 文政五年 十月」と刻まれています。このことから1822(文政5)年に摂津国(現在の大阪府北西部と兵庫県南東部)の灘の樽廻船問屋連中が設置したものであることがわかります。

1994(平成6)年12月に原形復旧した新しい方位石をそれぞれの日和山に設置し、方位石は志摩市歴史民俗資料館で保存、展示されています。



52

市指定有形民俗文化財

ご ち あかはた
五知の赤旗

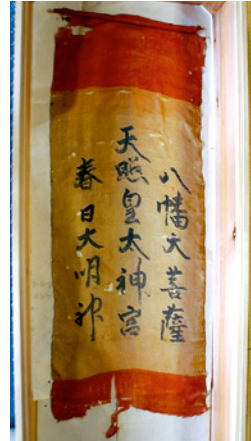
指定年月日: 2004 (平成16) 年 8 月 23 日

所在地: 福壽寺※

平家の落人伝説が残る磯部町五知の福壽寺に2^{りゅう}旗保存されています。「平家の赤旗」であると伝えられ、材質は共に絹帛^{けんぱく}で、三社神号のある1^{りゅう}旗は、長さ99.9cm、幅36.4cm、上下は水平に朱が塗られています。神号は、中央部に一段高く「天照皇大神宮」向かって右側にやや低く「八幡大菩薩」、左側に「春日大明神」と記され、下半部は損失しています。

もう1^{りゅう}旗は、長さ約2.5m、幅36.4cmで、平家の家紋である^{あげはちよう}鳳蝶が2つ描かれています。上部に描かれた鳳蝶は左向きに、そして下部のものは右向きに、さらにその側面図が墨で描かれ、余白はすべて朱で塗りつぶされています。

いつ頃作られたものかは不明です。



53

市指定無形民俗文化財

き しんじ
しめ切り神事

指定年月日: 1973 (昭和48) 年 3 月 31 日

場所: 安乗神社(阿児町安乗842)

1月10日に、安乗神社の参集殿前の広場で行う神事です。^{かみしも}袷姿でしめ切りを行う人を新加用(加用頭)、前年加用を務めた人を古加用と呼びます。

早朝、^{どうにん}禱人を務めた家々からワラを一束ずつ持ち寄り、「にしめをはやす」といって大蛇になぞらえたしめ縄を作ります。午後は、しめ縄の祈禱を済ませた後、神前と参集殿前の広場の2ヶ所で獅子舞を奉納します。

その後古加用2人の介添えにより、2人の新加用が長さ約37m、中心の太さ約1.3mが2ヶ所ある大しめ縄を、一番切り・二番切りの順に周りで見守る人たちの「ひとつ、ふたつ…」と太刀数を数える声と共に、最後が奇数になるように切り続けます。

住民は断ち切られたしめ縄のワラを、^{あくえき}悪疫退散や五穀豊穡、大漁満足のお守りとして持ち帰ります。



指定年月日:1973(昭和48)年3月31日

場所:宇気比神社(阿児町立神2100)

1月2日、宇気比^{うけひ}神社の境内で豊作と大漁を祈って行われる獅子舞神事です。神事は、^{くにんやく}宮司、^{くじんやく}九人役4人、^{とうや}9軒の^{かぐらぼうそう}禊屋によって行われます。午前中は、お神楽奉奏、鳥の舞、獅子迎えに続いて獅子舞が奉納されます。

午後になると、境内に^{むしろ}筵を敷き、古式のままだに^{ざはい}座配の行事が行われます。背中あわせに座ることから通称「しりくれあわせ」ともよばれます。

その間、^{わかしゅう}若衆と^{やくさいしや}厄歳者は、宇気比神社と秋葉神社の碑の間を百度往復します。途中、宇気比神社に入って、鳥の舞をはやし、夜は「鳥の若衆」として神事に参加します。

夜は、鳥の若衆が豊年竿2本を持って境内の上手へ入場し、下手の禊屋衆に甘酒やパッパの火(煙草の火)を請求します。それに応えて地区の中学生が務める「^{はぜ}馳の若衆」が甘酒やパッパの火を運び、火祭り神事が始まります。

時を見て、鳥の若衆が^{ほうねんざわ}豊年竿を広場におろして回すと同時に、^{こも}孤で作った小屋を破り、馳の若衆が焚くドンドの火をたたき消し、激しい攻防が繰り広げられます。やがて獅子を宮中へ追い込み、退場して神事が終わります。

起源は、獅子頭の裏面に天正年間の墨書きがあること、さらに装束や神事の言葉などから室町時代中期頃と考えられています。



55

市指定無形民俗文化財

こおどり
鼓踊

指定年月日:1986(昭和61)年3月31日

場所:阿児町甲賀字浜田海岸

8月13日に、甲賀字浜田の浜につくられた総碑(祭壇)の前で行われる、新亡者を供養するための大念仏行事です。「大念仏」「回向念仏」「地囃し」「和讃」「鼓踊り」の一連の行事をさします。鼓踊りは羯鼓踊りのことで、かんこ踊りと呼ぶ地域もあります。

甲賀地区の見宗寺、福満寺、妙音寺の寺年寄りによる念仏行事が終るころ、装束を整えた小中学生が台傘、高張提灯、傘鉾、花などをもち、小鼓、笛に合わせて浜へ繰り込みます。そして総碑の前で少年(小学6年生)が「祭文」を奏上した後、鼓踊りが始まります。

鼓踊りは3人の羯鼓打ちを中心に円形に並び、男女20余名が羯鼓と音頭に合わせて、棒振り、法螺吹きなどの鬼と共に踊ります。

起源は不明ですが、総碑の台の裏に「安政3年(1856)7月、見宗寺十世 宗叟代」と書かれていることから、この頃にはすでに行われていたと考えられています。



56

市指定無形民俗文化財

うがたししまい
鵜方獅子舞

指定年月日:1990(平成2)年6月25日

場所:宇賀多神社(阿児町鵜方1550)

1月1日から3日までの3日間、阿児町鵜方の宇賀多神社で行われる獅子舞神事です。

1日、境内で宮獅子1頭が舞います。舞い手が頭と尾に分かれて古式に則り舞を奉納します。獅子の脇には天狗の面を付けた「くどとり」が付き、案内役として獅子を誘導します。奏楽は笛と太鼓で行われ、獅子、くどとり、奏楽の三位一体で舞が進められます。

2日も1日と同様の舞が奉納されますが、「飛び舞」という技法が入り、1日より2節ほど多く舞います。

3日は、明治時代に合祀された権現社に奉られていた、雌獅子との2頭舞が奉納されます。最後の追い込みの舞のあと、獅子の口に参拝者がおひねりを投げ入れて、年内の家内安全と無病息災を祈念し、神事は終了します。

合祀されている八王子社と社宮司社(三狐神)の起源が室町時代中期と推定されることから、神事の始まりもその頃と考えられています。



指定年月日：2004(平成16)年8月23日

場所：磯部町渡鹿野

7月20日以降の金・土曜日に行われます。天王とは荒ぶる神、「牛頭天王」のことで、疫病よけの神と信じられていますので、疫病が流行する夏に祭りが行われます。

当日は、早朝から海水で身を清めた役人たちの手による花火を合図に、浜辺の鎮座槽に安置されていた神輿を八重垣神社へと運びます。続いて、神遷の儀式が始まり、御神体を神輿に遷し、各戸を「チョーサーヤー」の掛け声とともに回ります。

さらに、先払いの天狗が先頭で槍を持ち、鏡と幣を持った警護に続いて、太鼓、花取り、輿かき、その前後に提灯持ち、と行列が続きます。

そのまま各戸を一巡し、前の浜を3回走り（カラバシリ）、続いて勇壮なねり合いが始まり、神輿が上げられたあと、神社へ御神体が戻されて終了します。7年に一度、神船に提灯を飾り立て、囃子を演じながら島を一周する「大祭」が行われます。

起源は不明ですが、神輿に「文政二年(1819)」と墨書きされていることから、この頃にはすでに行われていたと考えられています。



指定年月日: 2004(平成16)年8月23日

場所: 宇気比神社(磯部町坂崎460)

磯部町坂崎の宇気比神社で行われます。古来坂崎の^{とうや}禊屋制度は、^{しんどう}新禊・^{ことう}古禊それぞれ一禊と二禊の2人ずつ、計4人で構成されていましたが、近年は地区役人の中から選ばれた4人が新禊と古禊を勤め神事を行います。

新禊の2人は、12月31日の朝、和服の正装に身を整えて^{しろのはな}城鼻へ^{しおか}潮搔きに行きます。その後、地区役人全員が参加して区民センターで餅つきをします。

1月1日の朝、皆が集まってくる前に新禊が火をモミ火^{おこ}で熾し、神社の灯明に上げて祭典が始まります。

次にザナラシ、サンヤサッサ、弓引き、チワヒキの行事が行われ、獅子舞が奉納されます。舞はほとんどなく、^{まいぎぬ}舞衣を引きのばして獅子を眠らせます。そして面タタキ役に首筋のあたりを扇子で強く3度打たれて起き上がった獅子に、神主が獅子餅12個(閏年は13個)をかませます。獅子は「アンガラン、アンガラン、茶碗のかけらもないやろか」と言いながら、^{しめ}注連上げた足をひきずり、大口を開けて半紙で包んだ銭を供えてもらい、境内を一巡します。さらにまた獅子を眠らせ、同じ所作を繰り返して一巡し、最後に一同ともに「日本一」と3回^{おおみえ}大見得を切り、神事は終わります。



指定年月日:1971(昭和46)年3月31日

所在地:阿児町志島

志摩市東部の太平洋に少し突き出た阿児町志島の集落に点在して、志島古墳群は残されています。以前には13基以上あったことが分かっていますが、現在、確認できる形で残されているのは4基のみです。そのうちおじょか古墳(11号墳)は県史跡に指定されています。いずれの古墳も現在の建築物や草木がなければ、海から見やすい場所に造られており、古墳時代には航行する船から、古墳群を眺めることができたと考えられます。

上村古墳(10号墳)は1916(大正5)年の大雨の影響で墳丘と石室が半壊しました。現在は石室の西側の壁と石棺が残されています。6世紀後半につくられ、7世紀まで使用されました。組合式の箱式石棺は長さ2.45 m、幅1.09 mで、東海地方でも屈指の大きさのものです。墳丘が大きく損なわれているため、墳形は不明です。石室から、馬具や冠、金糸、銅鍔をのせる承盤などの遺物が出土しました。

塚穴古墳(4号墳)は2012~2014(平成24~26)年に発掘調査が行われ、7世紀前半の古墳であることが分かりました。長さ7.7 m、幅2.2 mの長大な玄室(死者を埋葬する部屋)を持つ石室が良好に残されています。天井が入口に向かって次第に低くなることや羨道(玄室に至る通路)と玄室の境界がしっかりと造られていないという特徴から、伊勢市の外宮の裏山にある高倉山古墳の影響を受けて造られたと考えられています。銅鍔や金銅製の鈴、鉄製の盃、トンボ玉、銀で装飾された釘などの遺物が出土しました。これらの遺物は近畿中央部との関わりの中で入手されたものと考えられます。

松本塚古墳(9号墳)は直径約14 mの円墳ですが、調査が行われておらず、詳細は分かっていません。

残されている古墳は、その大きさや豪華な副葬品から、いずれも志摩地域を治めた有力者の墓と考えられます。



上村古墳



塚穴古墳

60

市指定史跡

とまりこふん
泊古墳とびがす
鳶ヶ巣1号墳ごうふん
鳶ヶ巣2号墳とびがす
鳶ヶ巣2号墳ごうふん
鳶ヶ巣2号墳

指定年月日: 2017(平成29)年4月28日

所在地: 大王町畔名1,2,28

3基の古墳は大王町畔名と阿児町志島の境界に位置しています。

泊古墳は前方部を北に向けた全長32.4mの前方後円墳です。1911(明治44)年、開墾中に石室が発見され、五鈴鏡、鉄刀、馬具、玉類、須恵器が取り出されました。後円部上には石室の天井石と考えられる緑色千枚岩6枚が露出しています。

鳶ヶ巣1号墳は前方部を北北東に向けた全長30.0mの前方後円墳です。切り立った崖の上にあるため、墳丘西側は大きく崩れています。鳶ヶ巣2号墳は鳶ヶ巣1号墳の東南東に近接して築かれた直径約11mの円墳です。

前方後円墳は有力者の墓の形とされていますが、志摩地域で確実なものは泊古墳と鳶ヶ巣1号墳のみです。2基の古墳は、見つかっている埴輪の特徴から5世紀末から6世紀前半に築かれたと考えられ、志島古墳群で古墳が造られない時期にあたることから、志摩地域を治めた人物の墓と考えられます。



泊古墳

61

市指定天然記念物

ぐんせい
トキワガキ群生

指定年月日: 1972(昭和47)年3月31日

所在地: 神明神社(阿児町神明23-1)

トキワガキは、本州から九州、沖縄にかけて分布する常緑樹です。樹高は10mほどで、樹皮は黒く、鱗のようにはがれます。梅雨頃に釣り鐘状の白い花をつけます。「トキワガキ群生」は、阿児町神明にある神明神社の本殿付近や参道など境内に生育する複数のトキワガキから構成されています。



62

市指定天然記念物

りんこうじ

隣江寺のイチョウ

指定年月日: 1999(平成11)年12月24日

所在地: 隣江寺(磯部町坂崎1192)

イチョウは、中国原産の植物と考えられています
が、病虫害に強いことから、室町時代以降、各地の
寺院や公園、街路樹などに植えられています。「隣
江寺のイチョウ」は、磯部町坂崎にある隣江寺境内
の鐘つき堂の脇に生育する雌株で、秋には銀杏が実
ります。2017(平成29)年11月現在、地上から1.5
mの高さの幹周囲長が5.5mになる大樹です。



63

市指定天然記念物

りんこうじ

隣江寺のクスノキ

指定年月日: 1999(平成11)年12月24日

所在地: 隣江寺(磯部町坂崎1192)

クスノキは、本州から九州、沖縄にかけて生育す
る植物で、大きく成長します。1年を通して葉が茂
る常緑高木樹ですが、春に新しい葉が伸びると、古
い葉は役目を終え、一斉に落葉します。「隣江寺の
クスノキ」は、磯部町坂崎にある隣江寺境内の階段
を上りきった場所に生育します。2017(平成29)年
11月現在、地上から1.5mの高さの幹周囲長が3.6
mの大樹です。



64

市指定天然記念物

やたて ちゃやあと
家建の茶屋跡のオオシマザクラ

指定年月日:1999(平成11)年12月24日

所在地:磯部町恵利原5

オオシマザクラは、春に純白の花をつける野生の桜で、全国に植林されているソメイヨシノやサトザクラの母種として知られます。オオシマザクラの樹皮には、横方向に傷をつけたように見える皮目が目立ちます。花は葉と同時に開花するので、葉の緑色にとけこみ、やわらかい印象を受けます。「家建の茶屋跡のオオシマザクラ」は、伊勢道路の脇を通して天の岩戸に向かう道筋にあります。老木ですが、根元付近および地上から約80cmまでの高さで、周囲長約1.2mの太さのしっかりとした幹を4本伸ばしています。太い幹からは多数の枝が南側の休耕田側に張り出すように伸び、早春には訪問者を迎えるかのように、たくさんの花を咲かせます。



65

市指定天然記念物

ぎょくせんあん
玉泉庵のナギ

指定年月日:1999(平成11)年12月24日

所在地:玉泉庵(磯部町迫間671)

ナギは、本州から四国、九州にかけての暖かい地域の山中に生育する常緑の植物で、幹は直立し大木になります。葉は厚く、細い葉脈が平行に走るのがみられます。初夏に淡い黄色の雌花と雄花が別々の株に咲きます。果実は、青緑色で球形をしており、表面には白い粉がついているようになります。「玉泉庵のナギ」は、磯部町迫間にある玉泉庵の境内の祠の横にある単木で、2017(平成29)年12月現在、地上から1.5mの高さの幹周囲長が3mになる大樹です。



66

市指定天然記念物

こまとや ひよりやま
小的矢の日和山のタブノキ

指定年月日:1999(平成11)年12月24日

所在地:磯部町の矢814

タブノキは、本州から沖縄にかけて生育する高木で、シイやカシとともに照葉樹林を代表する沿岸部に多い樹木です。新芽は赤く、まるで花が咲いているようにみえますが、花は黄緑色で目立たず、5月頃にひっそりと咲きます。「小的矢の日和山のタブノキ」は、磯部町の矢にある小高い日和山の上に生育しています。樹高は約15mで、大きく枝を伸ばし、まるで丘全体に傘をかぶせたような樹形をしています。斜面に生えており、地上約1.6m付近で太い2本の幹に分かれます。2017(平成29)年12月現在、2本の幹に分かれる直前の最も太い箇所は長径は1.7mになる大樹です。



67

市指定天然記念物

まとやむらじんじゃ
的矢村神社のイスノキ

指定年月日:1999(平成11)年12月24日

所在地:的矢村神社(磯部町の矢618)

イスノキは、本州から九州にかけて生育する常緑の高木です。イスノキは、アブラムシのなかまが寄生するため、子どもの握りこぶしのような大きさの「虫こぶ」ができます。この虫こぶを吹くと「ヒョウウ〜ヒョウウ〜」と鳴るため、イスノキは、「ヒョノノキ」と呼ばれることもあります。「的矢村神社のイスノキ」は、磯部町の矢にある的矢村神社の本殿脇に生育する単木です。神社は小高い丘の上にあり、参道の階段をのぼってゆくと、高くそびえ立つイスノキが見えてきます。2017(平成29)年12月現在、地上から1.5mの高さの幹周囲長が2.6mになる大樹です。



68

国登録有形文化財(建造物)

なかろくてんぽ
中六店舗

登録年月日:2011(平成23)年10月28日

所在地:磯部町上之郷392

木造2階建、瓦葺、建築面積172㎡

伊勢神宮内宮の別宮である伊雑宮の門前にあり、現在はうなぎ料理店として使用されています。屋号の「中六」は伊雑宮の御師であった中六太夫^{おし}から取り、江戸時代には旅館が建てられていたと言われています。周辺の歴史的まちなみも美しい「志摩市景観計画重点候補地区」にあります。

1929(昭和4)年に旅館として建築され、昭和後期に改修が行われました。1階には玄関以外に厨房や控室、私的な部屋が、2階には8畳を主とした客室が配置されています。集客を意識して、道路に面した側はほとんど開口部で構成されており、特に2階には大きな窓に高欄を設け開放的な外観が特徴的です。



69

国登録有形文化財(建造物)

だいおうさきとうだい もんちゅうおよ へい
大王埼灯台・門柱及び堀

登録年月日:2013(平成25)年3月29日

所在地:大王町波切54-3

灯台(高さ23m・建築面積58㎡)、堀(延長105m)、各鉄筋コンクリート造

大王崎一帯は、伊勢志摩国立公園の中でも海と岬、集落、灯台が造り出す優れた景観で知られ、大王埼灯台は絵かきの町・大王のシンボルとなっています。石工の町でもあり、石段や石垣も美しい「志摩市景観計画重点候補地区」にあります。

大王埼灯台は登ることができる15基の灯台の1基です。円筒形の灯室と灯塔、扇形の付属舎からなっています。志摩半島の東南端の断崖上に立地しており、この周辺は暗岩^{あんがん}の多い海の難所^{いしく}で、早くから灯台の設置が望まれていました。こうした要請を受け、関東大震災後初の新設灯台として1927(昭和2)年に設置されました。



70

国登録有形文化財(建造物)

あ の り さ き と う だ い
安乗埼灯台

登録年月日:2013(平成25)年3月29日

所在地:阿児町安乗795

高さ16m、建築面積27㎡、鉄筋コンクリート造

安乗埼灯台は、志摩半島に深く切り込んだ矢湾に突出する岬に建てられています。海の難所であるこの場所には、江戸期には灯明台とうみょうだいが設けられ、その後数回の建て替えを経て、1948(昭和23)年に現在の灯台が建てられました。現在の灯台は、白色の鉄筋コンクリート造で、円筒形の灯室、角柱形の灯塔、方形の付属舎で構成されています。映画「喜びも悲しみも幾歳月いくとしつき」や吉井勇の小説「志摩月夜」などにも取り上げられ、海とともに生きてきた志摩という地域を象徴する建物として親しまれています。

登ることができる15基の灯台の1基で、「灯台50選」にも選ばれています。隣接する灯台資料館ではその歴史を学ぶことができます。また初代の木造八角形の灯台は、東京都にある「船の科学館」で余生を過ごしています。



71

国登録有形文化財(建造物)

じんむさんけんどうじょう
神武参剣道場

登録年月日:2013(平成25)年12月24日

所在地:磯部町上之郷375-1

建築面積248㎡、木造2階建、瓦葺

伊勢神宮内宮の別宮である伊雑宮の門前旅館「吉角」の跡地に、1961(昭和36)年に剣舞道場として建築され、現在は剣道場として使われています。北隣には国登録有形文化財(建造物)の「中六店舗」があり、伊雑宮門前の歴史的景観に寄与する建物です。周辺の歴史的まちなみも美しい「志摩市景観計画重点候補地区」にあります。

五知の檜や棕本の杉、床柱は五知のヤマモモと十勝のブドウなど伊勢湾台風時に倒れた木が材料として用いられたと伝えられています。正面玄関には千鳥破風はふを設け、その上に「参剣」を表した鬼瓦をのせています。



主屋（建築面積95.2㎡、木造平屋建、瓦葺）、土蔵（建築面積19.8㎡）、門柱（間口3.0m）

1880(明治13)年に四国で生まれ、生命保険株式会社の各地の支店長を歴任した猪子弥平氏により、退職後の終の棲家として、旧志摩電鉄が開通し、賢島地区が保養地として息吹き始めた1934(昭和9)年に建てられました。

南と西に縁側が廻り、床の間と細かな格子戸を持つ書院や若草色の外壁で漆喰塗壁に漆仕上げの格天井の都会的な印象の洋間などの部屋があります。

映画「となりのトトロ」の「サツキとメイの家」のような、日本座敷と洋館造りの和洋折衷建築です。また、その活用も評価され、「ウッドデザイン賞2017」を受賞しました。



登録年月日:2016(平成28)年3月2日

所在地:志摩市歴史民俗資料館(磯部町迫間878-9)

志摩市歴史民俗資料館が収蔵する資料のうち、3,828点が登録されています。これらの生産用具は、1980(昭和55)年、旧志摩民俗資料館の開館に向けて、日本観光文化研究所(当時)が志摩半島全域(志摩市・鳥羽市・南伊勢町)で収集したものを中心としています。

使用年代は、主に明治後半から昭和30年代にかけてのもので、その種類は英虞湾や矢野湾などの「内海」や外洋に面した「表海」で使用された漁撈用具、そして主に内陸部で使われた稲作や畑作の農耕用具、その他山仕事や養蚕・養蜂の用具、生業を支えた船大工や桶屋・鍛冶屋に加え、集団的に活動していた石工や瓦屋・家大工など職人の用具など多岐にわたります。

このほか1983(昭和58)年まで賢島にあり、日本の真珠養殖の発展に寄与した旧国立真珠研究所の資料127点も関連資料として含まれ、志摩半島全域の近代以降の産業の特色をも示す貴重な資料群です。



志摩市の文化財

2018(平成30)年2月13日

編集・発行 志摩市教育委員会

三重県志摩市阿児町鶴方3098番地22

印刷 中央印刷

番号は文化財地図と対応しています。

番号	名称	マップ	番号	名称	マップ
1	銅造如来坐像	6-C	38	木造薬師如来坐像(浜島)	5-B
2	安乗の人形芝居	3-F	39	鰐口(安乗)	3-F
3	磯部の御神田	2-C	40	鉄製砲身	3-F
4	鳥羽・志摩の海女漁の技術	全域	41	鰐口(波切)	6-F
5	木造仏頭	6-C	42	紙本墨書陀羅尼経	3-E
6	木造薬師如来坐像(国府)	3-E	43	鵜方村文書	4-D
7	木造十一面観音立像(和具)	6-C	44	下之郷村水帳	2-C
8	鰐口(立神)	5-E	45	沓掛村袴屋文書	2-C
9	如来形坐像懸仏	1-C	46	和同開珎	2-C
10	紙本墨書大般若経(立神)	5-E	47	画文帯環状乳神獣鏡	2-C
11	紙本墨書大般若経(片田)	6-D	48	佐々木コレクション	2-C
12	埴製枕	2-C	49	高札	2-C
13	鹿角装大刀	2-C	50	切支丹制札と徒党制札	2-C
14	越賀の舞台	6-C	51	大的矢・小的矢の日和山方位石	2-C
15	波切のわらじ曳き	6-F	52	五知の赤旗	1-C
16	ささら踊り	5-E	53	しめ切り神事	3-F
17	志摩国分寺跡	3-E	54	ひっぽろ神事	5-E
18	浜島古墳	5-A	55	鼓踊	4-F
19	旧越賀村郷蔵	6-C	56	鵜方獅子舞	4-D
20	おじょか古墳	4-F	57	渡鹿野の天王祭	3-E
21	和具大島暖地性砂防植物群落	7-C	58	坂崎の神祭	3-D
22	宇気比神社樹叢	5-B	59	志島古墳群	4-F
23	石造宝篋印塔	4-E	60	泊古墳 鷹ヶ巣1号墳 鷹ヶ巣2号墳	5-F
24	石造五輪塔群(甲賀)	4-E	61	トキワガキ群生	4-D
25	志摩国分寺本堂	3-E	62	隣江寺のイチョウ	3-D
26	石造五輪塔群(波切)	6-F	63	隣江寺のクスノキ	3-D
27	木造大日如来坐像	4-F	64	家建の茶屋跡のオオシマザクラ	1-B
28	木造薬師如来坐像(安乗)	3-F	65	玉泉庵のナギ	2-C
29	曼荼羅石	4-D	66	小的矢の日和山のタブノキ	2-E
30	仏足石	5-E	67	的矢村神社のイスノキ	2-E
31	木造聖観音立像、木造護法神立像、木造観音立像	5-E	68	中六店舗	2-C
32	木造如来形坐像	3-B	69	大王埼灯台・門柱及び塀	6-F
33	木造十一面観音立像(五知)	1-C	70	安乗埼灯台	3-F
34	木造十王像附脱衣婆像(残欠)、司命像、司録像	2-C	71	神武参剣道場	2-C
35	木造薬師如来立像及び両脇侍立像	1-C	72	旧猪子家住宅主屋・土蔵・門柱	4-D
36	木造薬師如来坐像(波切)	6-F	73	志摩半島の生産用具及び関連資料	2-C
37	木造聖観音立像	6-D			



●問い合わせ先
志摩市教育委員会事務局
生涯学習スポーツ課
志摩市歴史民俗資料館
志摩市立図書館

志摩市阿児町鵜方3098番地22	TEL 0599-44-0339
志摩市磯部町迫間878番地9	TEL 0599-55-2881
志摩市阿児町神明1074番地15	TEL 0599-43-8000

あなたに夢を。宝くじ 街に元気を。



クーちゃん